

証 検

# 崩拓銀

<3> 10.10.8

拓銀側は、藤田が交渉の入り口で先手を打ってきたものと受け止めた。対等合併として拓銀から言い出した合併話とはいえ、道銀としては文書という明確な形で交渉の主導権を担保しておきたい。そんな思惑が行間からにじんでいた。

拓銀の役員室は本店三階にある。頭取をはじめ副頭取、専務、常務の部屋のほか、五つの応接室が並ぶ。壁にはいくつかの絵が飾られているが、都銀の役員フロアにしては地味な方だ。連休の合間の昨年五月一日の午後、その応接室の一つで、道銀の藤田恒郎頭取は、河谷禎昌頭取と向かい合った。

## しまずね

「これに署名してもらえませんか。藤田はそう言う」と、「合併に当たっての確認事項」

と書かれた四枚の紙をテーブルに置いた。手に取って読み始めた河谷の目に、意外な文句が次々に飛び込んできた。<新銀行発足時にその役員となる者も、新銀行頭取に「辞職願」を提出する>

「これ以上交渉継続が困難と判断したときは、合併準備をとりやめることができる」と、道銀行員の不満や不安を



# 主導権確保めぐり思惑

「この思いが膨らんでい、払しよくするには、藤田が主象付ける何かが必要だった。費やした。合併に基本合意しう語った。「藤田頭取は、言

の印象をこのを感じた。」「敬称略、同書は当時」「拓銀問題取材班」

## 帯封

拓銀との取引がある、その誇らしい証(あかし)が、六月に入ると、事態はさらにこじれた。拓銀本店役員室で、河谷と六回目の頭取会談

また傷ついていた。拓銀は四年、道銀も九五年に、財務内容を金融当局が厳しく監督する決算承認銀行に指定された。この事実は株主や預金者に知られることはなかったが、焦りは両行中枢に共通していた。異なっていたのは道銀行員の多くが「その後リストラを徹底し、単独でも生き残りは可能なまで回復した」と考えたのに対し、拓銀側は「合併しなければ両行とも将来はない」と主張していたことだ。

を、破たん・救済するイメーシだ」と。拓銀にとって、もはや道銀との合併に銀行の命運を託すことはできなくなっていた。拓銀は頭取会談の三日後、経営会議で「合併白紙撤回に備え、単独自立路線の体制も整えなければならぬ」との方針を固め、ただちに増資、不良債権の流動化、関係会社整理など、可能なあらゆる戦略を六月中にもまとめ上げるよう、関係部に指示した。

しかし、河谷にとってそれは以上にショックだったのは、大蔵省が拓銀に公的資金の投入を想定していることなを藤田が示唆し、「そういう形になれば、北海道の店舗は引き受けまますよ」と付け加えたこと。公的資金投入は破たんした。処理を意味する。会議後、河谷は幹部に会談の印象をこのを感じた。」「敬称略、同書は当時」「拓銀問題取材班」